

モダンの社会理論の限界に関する一考察 ——フーコー＝ハーバーマス論争を導きの手がかりとして¹⁾——

Rethinking the Foucault / Habermas debate

下村 晃平*

はじめに

1980年代から1990年代のはじめにかけて、フランスの思想家ミシェル・フーコーとドイツの哲学者ユルゲン・ハーバーマスを比較する試みが広くおこなわれた²⁾。精神分析家スラヴォイ・ジジェクは1989年の著作の序文で次のように述べている。「今日の知的状況の前面を占めている大論争、すなわちハーバーマスとフーコーの論争」(Žižek 1989=2000)と。また、日本でも似たような状況にあった。政治学者の藤原保信たちは1987年の著作のなかで次のように述べている。「わが国においても、外国においても、現在もっとも読まれ、おそらくもっとも影響力を及ぼしている政治・社会思想家を二人あげるとするならば、それはミシェル・フーコーとユルゲン・ハーバーマスであろう」(藤原・三島・木前 1987:1)。

何がこの二人の論争の争点であったのだろうか。ある人はフーコーのハーバーマスへの次のような批判を思い浮かべるかもしれない。すなわち、ハーバーマスの主張するような対等な立場にもとづくコミュニケーション的關係は、現実の「権力」関係を覆い隠してしまっている、という批判である(Foucault 1984e=2002)。あるいは、ハーバーマスのフーコーに対する次のような批判を思い浮かべるかもしれない。すなわち、近代のプロジェクトであ

* 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

る啓蒙の理念は実現されなければならず、それに反対するフーコーは反近代主義を掲げる「青年保守派」の一員である、という批判である³⁾(Habermas 1980=2000)。

しかし、そうした想定に反して、実際のフーコー=ハーバーマス論争はややこしいものとなっている。フーコー=ハーバーマス論争についての論文集を編集したマイケル・ケリー Michael Kelly は、この論争の特徴を以下の六点にまとめている (Kelly 1994:4-5)。

- ① 初期の不完全なこの論争の諸条件は明らかではない。
- ② フーコーとハーバーマスが互いに相手について言及した箇所は、ハーバーマスの側にその数が大きく偏っている。
- ③ この言及の数の偏りの結果、この論争はあまりにも頻繁にハーバーマス主義者たちの言葉によって構成されている。
- ④ フーコーに関するハーバーマスの批判が、1970年代後半に書かれたフーコーの仕事に向けられているのに対して、ハーバーマスへの応答は、1980年代に書かれた彼の仕事のパースペクティブからなされている。
- ⑤ フーコーが死んでから、この論争に関する文献の跡をたどった研究は、①～③までで述べたことに似た性格のものが目立っている。
- ⑥ フーコー=ハーバーマス論争のフーコーについての英語文献の多くが、程度の差はあれ、彼らの哲学的関心において、ハイデガー主義者である人々によって書かれている。

1984年秋にアメリカで開催が予定されていたフーコーとハーバーマスの討論会は、フーコーの突然の死によって実現することはなく⁴⁾、さらに、ハーバーマスがフーコーよりも熱心に批判を展開したことから、フーコー=ハーバーマス論争の主導権は基本的にハーバーマスの側に握られてきた

(Ashenden and Owen 1999)。また、この論争には、彼らの支持者たちのやり取りも含まれており、そのことがさらに状況をややこしくしている。そのため、アメリカ・フランクフルト学派のエイミー・アレン Amy Allen は、そのような状況を次のように表現している。「フーコー＝ハーバーマス論争として一般に知られるものは、その大半がこの二人の思想家についての二次的な創作物によるものである」と (Allen 2009:1)。

このように、フーコー＝ハーバーマス論争は論争ならざる論争とでもいうべき様相を呈している。けれども、論争がかみ合わなかったのが事実だとしても、フーコーとハーバーマスを比較する論考が数多く書かれたこともまた事実である。なぜ、この時期にフーコーとハーバーマスの著作が世界中で読まれたり、彼らの論争について言及する論考が書かれることになったのだろうか。

そうした疑問に対しては社会学者のスコット・ラッシュによる説明が参考になるだろう。ラッシュはその理由を次のように説明する。

…いったい何がマルクス主義にとって代わるのであろうか？ この何年かにわたって多くの国々で論者はこうした疑問を提起し、そしてマルクス主義を継承する今日の批判理論として、一方でユルゲン・ハーバーマスの著作が関心を寄せるコミュニケーション的理性の倫理を、またもう一方でミシェル・フーコーの著作が例示する言説的権力の分析学を挙げている。(Lash 1994:110=1997:206)

ラッシュは、フーコーとハーバーマスをめぐる論争をマルクス主義の退潮と結びつけて考えている。1990年前後は社会主義を標榜する国家が次々と崩壊した時期であり、その理論的基盤をなしていたマルクス主義あるいはマルクスの理論に対する信頼が低下した時期でもある。また、旧来のマルクス主義がその理論の前提としていたフォーディズム体制の経済構造からポスト・

フォーディズム体制への移行が誰の目にも明らかになった時期であり、グローバル化が叫ばれるようになった時期でもあった。もし仮に、社会理論が現実社会を理解するための枠組みを提示するものであるとしたら、1990年前後に、多くの人々がマルクスの理論はもはや時代遅れであり、それに代わる理論としてフーコーの権力論やハーバーマスのコミュニケーション的行為の理論を考えていたのだともいえる。つまり、「ゆたかな社会」における諸問題を考えるにあたって、フーコーとハーバーマスの理論はマルクスの理論よりも上手く説明できるのだ、と。しかしながら、「短い20世紀」(ホブズボーム)以降の社会は大きな変化を遂げた。グローバル化の進展、とりわけ、金融市場の拡大(金融化)と情報技術の発展(情報化)は「ヒト・モノ・カネ・サービス」の世界規模での移動を加速させ、社会のあり方を大きく変えた。フーコーとハーバーマスが問題にした国民国家規模での問題(軍隊や学校における規律訓練の問題や福祉国家の正統性の問題)よりも超国家規模での諸問題(気候変動やグローバルな格差の拡大)が叫ばれる時代である。

はたして、フーコーとハーバーマスの理論はこうした社会の変化を理解する枠組みたりえるのだろうか。もし仮に、彼らの理論にそうした諸問題を扱うのに難点があるとしたらそれはどのようなものであろうか。本稿はそのような問題意識から彼らの理論を点検することを試みるものである。しかし、紙幅の都合のため、フーコーとハーバーマスの理論体系をその全体にわたって検討することはできない。そのため、ここでは、「主体化 subjectivation」概念に論点をしばって論じることにする。その理由は、フーコーとハーバーマスはともに「主体化」について論じていることから、両者の理論を比較するトピックになりうるからである⁵⁾。フーコーの主体化論は「自己」との関係を重視するものであり、ハーバーマスの主体化論は「他者」との関係を重視するものであるが、しかし、両者の主体化論では「モノ」との関係が軽視されていることを本稿では明らかにする。

本稿の目的は、(1) フーコー=ハーバーマス論争を両者の主体化概念を軸

に再構成すること。(2) 両者の主体化概念の比較検討をとおして、その限界を明らかにすることである。

本稿の構成は以下のとおりである。まず第一章でハーバーマスのフーコー批判を概観する。ハーバーマスがおこなったフーコー批判はいくつかあるが、ここでは『近代の哲学的ディスクルス』におけるフーコー批判をとりあげる。その理由はハーバーマスによるフーコー批判が最もまとまった形で展開されているからである。第二章で、ハーバーマスの批判に対して、フーコーがどのような反論をおこなったのかを（あるいは、おこなおうとしたのかを）いわゆる後期フーコーの視座から論じる。ここではフーコーが、ハーバーマスの批判に対する回答として「自己の技法」による主体化論を構想していたことを明らかにする。第三章で、ハーバーマスとフーコーの主体化論を比較検討する。ハーバーマスの主体化（「社会化による個人化」）は「他者」との関係を重視するものであり、それに対して、フーコーの主体化（本論ではそれを「自己の技法による美学化」と呼ぶ）は「自己」との関係を重視するものである。一見したところ、異なる両者の主体化論が、同じ世界図式を背景におこなわれていることを論じる。さらに、そのうえで、両者の主体化論の限界について考察する。彼らの主体化論には「モノ」の果たす役割にたいする注意が十分に払われているとはいえ、そのことが今日の社会状況を思考する上で問題となることを明らかにする。

第一章 ハーバーマスのフーコー批判

本章では、まず、ハーバーマスはフーコーの権力論の何を問題したのかを概観する。ハーバーマスは、フーコーの権力論が抱える問題として、①意図せざる現在中心主義、②不可避の相対主義、③恣意的な党派性、という三つのアポリアを指摘する。そのうえで、ハーバーマスは、フーコーの権力論では(1) 社会的秩序はいかにして可能か、(2) 個人と社会は相互にいかにして

関わり合うのか、という二つの問題を説明することができないと主張する。

このようなハーバーマスによるフーコー批判の根底には、近代の主観哲学が陥ったアポリアをどのようにして突破すればよいのか、という問題意識がある。ハーバーマスが考えるのは、フーコーのような権力還元論ではなく、「コミュニケーション的理性」にもとづく対等な関係の人々による対話的行為による解決である。その後、ハーバーマスの理想を実現するための手段が「社会化による個人化」であることを明らかにする。

第一節 権力理論のアポリア

ハーバーマスは『近代の哲学的ディスクルス』（1985）の二つの章でフーコー批判を展開している⁶⁾。その第九章（「理性批判による人間諸科学の正体の暴露——フーコー」）において、ハーバーマスは前期フーコーの考古学の問題を以下のように整理する。(1) ハイデガーとの類似、(2) 構造主義との接近、(3) 知の考古学と言説分析をどう接合するのか、といった問題である。そして、中期のフーコーはそうした問題を解決するために「権力」のカテゴリーを「知の考古学」に導入したのだ、とハーバーマスは主張する。フーコーの「権力」カテゴリーの使用法にみられる特徴は以下の二点である。

(1) 権力技術の分析における経験的役割

フーコーの系譜学は、人間諸科学がいかなる社会的機能と連関しているのかを説明する。そのさい、権力関係で問題となるのは、それがどのような成立の条件を持つのかということであり、科学的な知にどのような社会的役割を与えるのかということである。

(2) 権力技術の分析における超越論的役割

フーコーの系譜学は、人間諸科学の言説がそもそもいかにして可能かを説明するものとされる。そのさい、権力関係が科学的な知を構成する条件を説

明するために用いられる。

このような「権力」の異なる二つの対立する（「経験的」対「超越論的」）使用法を一つにしたのが系譜学的な歴史記述（権力論）である。ハーバーマスのよれば、このような権力論を基礎にした系譜学的な歴史記述は、三つの転回をもたらすことになる。すなわち、(1) 意味連関の解釈学的解明に代わって、それ自体としては意味をもたない構造の分析をおこなうこと、(2) 妥当性請求をもっぱら複合した権力の機能として問題にすること、(3) 価値判断や批判の正当化の問題を排して、価値判断から自由な歴史的説明に終始すること、である。この三つの転回を経ることで、「系譜学的研究は、いまや疑似科学に取って代わり、間違った自然科学のモデルに追従することなく、いつの日かその科学としての地位を、自然科学と競い合うことになる」のである（Habermas 1985:324=1990:488）。

けれども、ハーバーマスに言わせると、このようなフーコーの系譜学は失敗に終わることになる。なぜなら、系譜学は、権力の実践が変化するのを、その実践に関与する者から距離をとって禁欲的な態度で記述するという反省を欠いた客観性に引きこもることで、「現在中心主義的で、相対主義的な、そして背後に規範的なものを隠した見かけだけの科学という本体、それが望みもしなかった本体を現わしてくる」ことになるからである（Habermas 1985:324=1990:489）。ハーバーマスの主張するフーコーの系譜学的記述の陥る三つのアポリアを一覧にしたのが以下の表である⁷⁾。

表 1. フーコーの系譜学的記述（権力論）の陥る三つのアポリア

① 意図せざる現在中心主義	歴史記述者が出発点にする状況に拘束され、その歴史の記述が意図しないままに現在を中心におく立場をとること。
② 不可避の相対主義	現在と結びついた分析が、そのつどのコンテキストに依存した実践的な企てとしてしか理解されないため、不可避の相対主義におちいること。
③ 恣意的な党派性	批判が、自らの規範的土台を排除しえないために、ある特定の党派的な立場を恣意的に採らざるをえなくなること。

(1) 意図せざる現在中心主義

フーコーは歴史を記述するにあたって、解釈学者のように歴史の当事者たちが組み込まれている文脈の中で理解せずに、あらゆる事柄を客観的に眺めようとすることで、かえって「現在」中心的な見方をしてしまうことになる。どのような歴史家であっても、権力の技術や支配の実践は、相互に比較することでしか説明することはできない。そのため、ハーバーマスに言わせれば、フーコーの「このような歴史記述は、現在の要求のために過去の観察を手段化してしまうのである」(Habermas 1985:327=1990:493)。

(2) 不可避の相対主義

フーコーはあらゆる理論は権力と表裏一体の関係にあるとし、人間諸科学と近代の権力との共犯関係を強調したが、そうした権力理論は彼自身の理論にも自己言及的にはねかえってこざるをえない。フーコーは自身の系譜学を人間諸科学から区別するために、系譜学的記述（権力論）をみずからに適用することで、系譜学の妥当性を保証できると考える。つまり、系譜学は「知としての資格を奪われた類の知を駆使して、既成の学問の外に追いやられ、〈従属を強いられた知〉による反乱のための媒体となる」(Habermas 1985:328=1990:495) ことで、「権力の実践に抵抗する側に味方する」(Habermas 1985:329=1990:496) のである。このような知としての資格を奪われた人びとの知と結びつくことが、系譜学を人間諸科学よりもまさるもの

とする理由なのである。しかし、そのような反権力（対抗権力）という位置からでは、対抗権力が、権力に勝利するとただちに、それ自身が権力に転化して別の対抗権力を招くことになる。知の系譜学もまた、この繰り返しから逃れることはできない。

(3) 恣意的な党派性

フーコーの系譜学は「言説や権力の編成のどれが、他よりも正しいものといえるかと問うのをやめにする」(Habermas 1985:331=1990:498)。そのため、「フーコーは、ある立場を採る必要性を認めない」のである (Habermas 1985:331=1990:498)。しかし、そのようなフーコーの態度は、表面では規範的なもの一切から自由な立場を表明しておきながら、隠れたところではある特定の規範的な立場をとっている。フーコーは権力に抵抗しなければならないと言うが、その根拠を示していない。系譜学的な歴史記述は、権力の編成に対して、交戦を挑むための手段、戦術と考えられるが、「そもそもなぜ、われわれはその権力に服従せずに抵抗しなければならないのか」を説明できていない (Habermas 1985:333=1990:501)。

これら三つアポリアから生じる問題として、ハーバーマスは、(1) 社会的秩序はいかにして可能か、(2) 個人と社会は相互にいかにして関わり合うのか、という二つの問題が生じると主張する。(1)の問題に関して、フーコーの権力論では、価値や規範、および相互了解の過程にもとづいて行為領域を安定化させる方法を認めることができず、また、(2)の問題に関して、フーコーが権力形成のモデルしか認めないのであれば、「成長の途上にある者の社会化でさえ、狡猾な手口による闘争の過程というイメージで表されてしまう」ことになる (Habermas 1985:337=1990:506)。つまり、フーコーの権力論では、権力関係以外の社会的関係を考えられない。そのため、権力に抵抗することができなくなるとハーバーマスは考えるのである。

第二節 主観哲学からの脱却

ハーバーマスはこの問題を「主体中心の理性から対話的理性へのパラダイム転換」をはかることで解決しようとする。『近代の哲学的ディスクルス』におけるフーコー批判の第9章と第10章に続く、第11章「主観哲学を脱出する別の道——〈対話的理性〉対〈主体中心的理性〉」の中で、ハーバーマスは自身が行っている哲学的プロジェクトの説明をおこなっている。

ハーバーマスは既存の哲学（主観哲学）が「自己意識」を哲学的思考の出発点にしていることを批判することから議論を始めている。そのような主観哲学に対してハーバーマスは、そもそもわれわれは「他者」との相互行為の関係のなかに存在しているのであり、そこから議論を始めるべきである、と主張する（Habermas 1985:347-348=1990:525-526）。

このようなハーバーマスの超越論的な主体像に対する批判をフーコーもまた共有している⁸⁾。しかし、ハーバーマスは、フーコーの系譜学的な権力分析によって、問題は解決しないと主張する。

私が示しておきたかったのは、フーコーの論議の起点であったジレンマは、パラダイム転換が起きればまったく根拠のないものになりうるということであった。すなわち、知識に執着し、疑似科学に取り込まれた主観性が起こす宿命的な動きを説明するにあたって指摘していたジレンマである。主体中心の理性から対話的理性へのパラダイム転換は、モデルネに最初から内在している対抗的ディスクルス *Gegendiskurs* を再び取り上げる勇気を与えることもできる。ニーチェの徹底的な理性批判は、形而上学批判の路線においても、権力理論の路線においても整合性をもって貫徹しえないのであるから、われわれとしては主観哲学からの別の脱出の道を求めなければならない。（Habermas 1985:351=1990:530）

それでは、どのような「脱出の道」を示すのか。ハーバーマスが示すのは

「他者」との了解を志向するコミュニケーションによる解決である。

いまだに人気の高いディスコンストラクションの作業が、これといった結果を手にするのは、自己意識のパラダイム、つまり、孤独に認識し行為する主体の自己言及のパラダイムが、別のパラダイムに取って代わられるときしかない。それは、了解のパラダイム、すなわち、対話的に社会化され、互いに相手を認め合う、相互的承認を行なう個々人の相互主観的関係のパラダイムである。(Habermas 1985:360=1990:543)

第三節 ハーバーマスの主体化——社会化による個人化

ハーバーマスが主張する「対話的に社会化され、互いに相手を認め合う、相互的承認を行なう個々人の相互主観的関係のパラダイム」とはどのようなものか。ここでは、ハーバーマスの『コミュニケーション的行為の理論』を主に参照しながらそれを確認する。

まず、「個人」の話に入る前にその前提となっているハーバーマスの「社会」の見方について説明する。ハーバーマスは社会を大きく分けて二つの領域からなるものだと考えている。すなわち、「道具的理性」が主流の地位を占める「システム」と「コミュニケーション的理性」が主流の地位を占める「生活世界」である（図1を参照）。

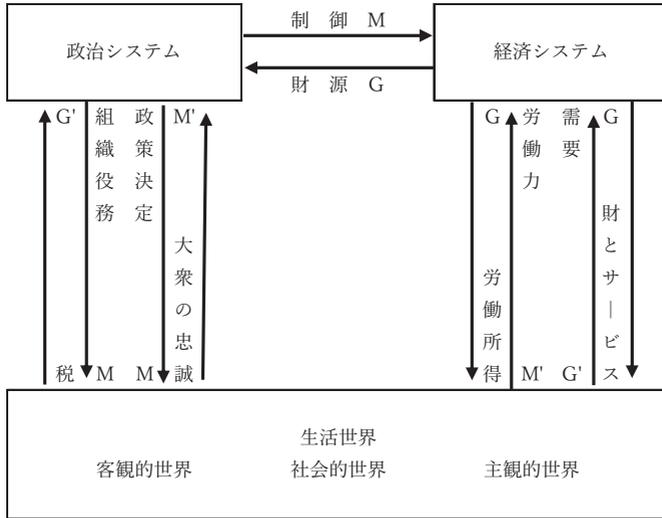


図 1. システムと生活世界の関係

(G = 貨幣メディア、M = 権力メディア)

※Habermas (1981:473=1987:310) と向山 (1994:202) を参考に筆者が作成

それぞれの領域において、人びとは「成果志向型」(政治・経済システム)と「了解志向型」(生活世界)という異なる目的・意図をもって行為しているとハーバーマスは考える。そのような人びとの行為類型をハーバーマスは、以下のような表で説明している。

表 2. ハーバーマスによる行為類型 (Habermas 1981:384=1986:21)

行為志向	成果志向型	了解志向型
非社会的	道具的行為	—
社会的	戦略的行為	コミュニケーション的行為

表を見ればわかるように、ハーバーマスは、(1) ある行為がおこなわれた状況が社会的であるかどうか、(2) そしてその行為が成果を志向するもの

(目的-手段的なもの)であるか、それとも了解を志向するものか、という二点をみることで、ある行為が「道具的行為」か「戦略的行為」または「コミュニケーション的行為」のいずれかであるのかを判断する。その際、ハーバーマスにとって重要なのは、ある行為が「了解」を志向するものであるかどうかである。この「了解」についてハーバーマスは次のように述べている。「了解とは、言語能力と行為能力をそなえた主体の間で一致が達成される過程である」(Habermas 1981:386=1986:23)。そして、このような「了解過程が目指すのは、ある発言の内容に対して合理的に動機づけられて賛同するための条件を満たしている同意である」(Habermas 1981:387=1986:24)。

「了解」を志向する「社会的」行為であるコミュニケーション的行為は、生活世界を構成する行為であり、その了解の基準(「真实性」「正統性」「誠実性」)が異なっていたとしても、客観的世界、社会的世界、主観的世界において人びとを媒介する。そして、「権力メディア」と「貨幣メディア」を通じたシステムにおける戦略的行為と生活世界におけるコミュニケーション的行為をわけることで、ハーバーマスは「理性」を「コミュニケーション的理性」と「道具的理性」とに区別する。そのうえで、ハーバーマスは、成果を志向する戦略的行為とは異なり、他者との合意形成を目指すコミュニケーション的理性の側に権力関係に抵抗する可能性を見出すのである。

それゆえ、ハーバーマスの主体化は「他者」との「コミュニケーション」に重点を置いたものになる。たとえば、ハーバーマスは「個人化と社会化は並行する」ことを繰り返し主張する。ハーバーマスがいう「個人化」とは、主体が人格的な自己同一性(アイデンティティ)を形成するプロセスのことである。ハーバーマスが「間主観的に承認された自己同一化」(Habermas 1976:21=2000:18)という言葉を用いているように、主体化の当事者は、他者と自己の区別をそのつど他者によって承認されることをとおして自己同一性(アイデンティティ)を獲得する。

同一性は、社会化によって生ずる。すなわち、成長過程にある子供は、象徴的な普遍性を獲得することを通して、ある特定の社会システムにまずは統合される。他方、この同一性はやがて個体化を通して、すなわち、社会システムに対して独立性が増大してくることによって、確実なものとなり、自分を展開していくことになる（Habermas 1976:68=2000:74）

このように、ハーバーマスの主張する主体化は個人で完結するようなものではなく、他者とのコミュニケーションを通じておこなわれるものである。その理由として、ハーバーマスは社会化と個人化を「脱中心化」の過程として説明する。それは社会システムのレベルにおいては、同じ宗教を信仰し、同質性の高い成員からなる伝統的社会（農村共同体）から、社会的分化（および社会的分業）が進み、見知らぬ人々が集住する都市生活を基盤とする多様な成員からなる近代社会（国民国家）への社会体制の変容において説明される（Habermas 1981=1986）。また、個人レベルにおいては社会規範の内面化の過程として説明される。つまり、子どもが成長し、まずは、両親とのあいだ（家族のレベル）で、次に友人など自身が所属するコミュニティの成員とのあいだ（具体的な共同体のレベル）で、そして、見知らぬ人々とのあいだ（たとえば、国民や市民といった抽象度の高いレベル）で、社会生活を送るうえで必要な規範を内面化していく過程として説明される（Habermas 1982=1990）。

このようにハーバーマスは必然的に社会化と「個人化（個性化）」が結びついていると説明する。そのため、ハーバーマスはそのような個人が主体になるプロセスのことを「社会化による個人化 Individuierung durch Vergesellschaftung」と呼ぶのである（Habermas 1988=1990）。

第二章 後期フーコーの応答——自己の技法による美学化

ハーバーマスはフーコーの権力分析の枠組みでは権力に抵抗する主体を描き出せないことを問題としていた。しかし、フーコーが「権力関係のあるところにはつねに抵抗もある」と繰り返し主張していたことも事実である。それではフーコーはどのような抵抗を考えていたのだろうか。

あるインタビューの中で、ハーバーマスは1983年のパリ滞在時におけるフーコーとのやり取りを振り返りながら次のように述べている。「その当時、私は、彼の批判が依拠している暗黙の基準について尋ねました。彼は単にこう答えました「私の『性の歴史』の第三巻を待ってくれ」と」(Habermas and Foessel:2015)。このやり取りかも見てとれるように、後期フーコーがハーバーマスの批判を意識していたことは間違いないだろう。実際、フーコーは『性の歴史Ⅲ』と同時期に出版された『性の歴史Ⅱ』の序論の中でハーバーマスを意識しながら次のように述べている。

ところが、哲学の言説が自分に無関係な何らかの知にかんしておこなう鍛錬によって、いったい何が自分自身の思索のなかで変わりうるか、それを探究するのはその言説の当然の権利なのである。《試論》——それは真理のゲームのなかでの自己自身の変革をめざす試練、という意味でなければならない、他者を単純化したやり方でコミュニケーションの諸目的にあてはめる、という意味に理解してはならないのだ。(Foucault 1984a:15=1986:16、傍点筆者)

それでは、後期フーコーはハーバーマスからの批判に対して、どのように反論しようとしたのだろうか。二人の討論会が実現しなかったことや『性の歴史』シリーズが未完で終わったことなどから、フーコーの反論ははっきりとした形で残っていない。本章では、後期フーコーのいくつかの講演とエッ

セイからそれを考察することを試みる。

第一節 自己の技法に対する注目——ハウィソン講演 (1980)

フーコーは、ハウィソン・レクチャー委員会の招待により、1980年10月20日と21日の2日間にわたって、アメリカのカリフォルニア大学バークレー校で講演会をおこなっている（ハーバーマスも1988年に講演をおこなっている）。その初日の講演内（「真理と主体性 Truth and Subjectivity」）でフーコーはハーバーマスについて言及している⁹⁾。

ハーバーマスによるいくつかの示唆にもとづけば、私たちは人間諸社会における主要な三種類の技法を区別することができます。すなわち、事物を生産したり、変形したり、操作したりすることを私たちに可能にさせる技法や、記号システムを使用することを私たちに可能にさせる技法、そして諸個人の振る舞いを規定したり、彼らに特定の意思を課したり、特定の目的や目標に彼らを従わせたりする技法のことです。言い換えれば、生産の技法、記号化の技法、そして、支配の技法が存在するのだと言えます。…私が考えるに、それがどのようなものであれ、あらゆる社会には、別の種類の技法が存在します。その技法とは、諸個人に、彼ら自身の仕方によって、彼ら自身の身体、彼ら自身の魂、彼ら自身の思想、彼ら自身の振る舞いに一定程度はたらきかけるものであり、またある意味では、彼ら自身を変化させたり、改造するものであり、そして、完璧、幸福、純粹、超自然的パワーなど、ある特定の状態に到達するためのものでもあります。このような種類の技法をたんに「諸技法」あるいは「自己のテクノロジー」と呼ぶことにしましょう。(Foucault 2015:24-25、傍点筆者)

以上の引用で興味深いことは、フーコーが「自己の技法」を説明するのに、

ハーバーマスを引き合いに出していることである。よく知られているように、ここで述べられている「自己の技法」は、『性の歴史Ⅱ』や『性の歴史Ⅲ』、そして1980年代のコレージュ・ド・フランスの講義において、フーコーが力点を置いて説明する概念である。しかし、ハウィソン講演以降、フーコーはハーバーマスに言及しながら、この概念を説明してはいない(Foucault 1988=2004)。そのことが何を意味するのかは本論では扱わない。しかし少なくとも(1)自己の技法はハーバーマスを念頭におきながら提示された、(2)自己の技法は主体化に焦点をあてた概念である、ことが引用から読み取れる。とりわけ興味深いのは、ハーバーマスが主張した生産の技法、記号化の技法、そして、支配の技法とは異なる技法を「自己」に対するものに求めた点である。後期フーコーは、権力作用に抵抗する基準点を「自己の技法」による「自己」への働きかけの中に見出すのである。

第二節 他者の支配から自己の支配へ——「主体と権力」(1982=1984)

しかし、このようなフーコーの説明は、中期フーコーの説明と矛盾していないだろうか。本稿で取り上げたハーバーマスのフーコー批判は、権力に抵抗することを不可能にしてしまうフーコーの権力論に対して向けられていた。では、矛盾しているように思える中期フーコーの権力論と後期フーコーの「自己の技法」とはどのような関係にあるのか。

その問いを考えるにあたって、フーコーの1982年に英語で刊行され、その後、フランスで刊行される際にその第二部が書き改められた小論(「主体と権力¹⁰⁾」)が参考になる。

この小論は、ハーバーマスのコミュニケーション的行為の理論を念頭に置いて書かれており、そこでフーコーは自身の権力論とハーバーマスの行為論を比較検討している¹¹⁾。フーコーのねらいは「言語、記号体系あるいは他の象徴的媒体を用いて情報を伝えるコミュニケーションの諸関係と、権力関係を区別する」(Foucault 1982:217=2001:22) ことによって、「権力関係はある

特殊な性格を持っている」(Foucault 1982:219=2001:24) ことを明らかにすることである。

「いかに」ということの分析によって権力のテーマに取り組むことは、それゆえ、根源的な権力についての仮説と関連して、いくつかの批判的シフトを成し遂げることである。それは、分析対象として権力ではなく、権力関係を提示する——権力関係は、対象的能力ともコミュニケーション的關係とも区別される。要するに、権力関係は、これらの能力やコミュニケーション的關係との連関の多様性において把握されうると言ってもよいだろう。(Foucault 1982[2001a]:219:1054=2001:24)

では、対象的能力ともコミュニケーション的關係とも異なる権力関係の独自性とは何か。フーコーは権力関係と「モノ」に働きかける対象的能力(ハーバースの用語では道具的行為)とを区別する。フーコーにとって権力関係は「諸個人間(あるいは諸グループ間)で結ばれた関係」(Foucault 1982:217=2001:21)である。したがって、「モノ」に直接的に働きかける物理的な力の行使は権力とは無関係である。また、他者に行使されずに個人の内にある力も権力ではない。権力の行使とは「行為主体が行動する限り、あるいは行動しうる限りにおいて、主体に対して作用する様式である」(Foucault 1982[2001a]:220:1056=2001:25)。

それでは、どのような場合に、ある行為は権力となるのか。フーコーは次のように答えている。

権力の行使は、「諸行為を導き」その可能性を調整することにある。根本的に権力は、二つの敵の間の対立あるいは他方に対する一方の拘束といったものではなく、「統治」の問題なのである。(Foucault 1982[2001a]:221:1056=2001:25)

ここでフーコーが「統治」という言葉で表現するのは、国家による統治だけではなく、広く社会全体で個人や集団の行為にむけられていた手段や方法をも含めた広い意味での統治である。フーコーにとって権力の行使とは、他者の可能な行為に作用する行為のことであり (Foucault 1982[2001a]:220:1056=2001:25)、権力作用とは「他者による統治」のことである。フーコーはこのように権力を定義することで、あらゆる場所に偏在する権力による主体化=従属化に対して、自己の技法による主体化を考える可能性を見出すのである。

第三節 自己の技法による美学化

権力を他者による支配と定義することで、後期フーコーは何を主張しようとしていたのか。一つ言えるのは、「自己の技法」による「自己の自分自身による変容」をフーコーは考えていた、ということである。フーコーが考えるのは、「権力の技法」によってなされる従属化を通じた主体化ではなく、「自己の技法」によってなされるより積極的な意味を持つ主体化である。フーコーはそのような主体化を芸術作品の作成に例えたことがある。

われわれの社会では、アートはもっぱらオブジェにしか関与しない何らかのものになってしまい、諸個人にも人生にも関係しないという事実にわたしは驚いています。アートが芸術家という専門家によって作り出される一つの専門領域になっているということにも驚きます。しかし個人の人生は一個の芸術作品 *une œuvre d'art* になりえないのでしょうか。なぜ一つのランプとか一軒の家が芸術の対象であって、われわれの人生がそうではないのでしょうか (Foucault 1983a[2001b]:236:1211=2001:241)。

フーコーにとって、このような芸術作品としての人生をあつかう方法が

「自己の技法」なのである。『性の歴史Ⅱ』の序論において、フーコーはそのことを次のように述べている。

それ〔自己の技法〕は熟慮され自発的な実践であると解さなければならず、その実践によって人々は、自分に行為の規則を定めるだけでなく、自己自身を変革し、独自の存在として自分を変えようと努力し、自己の生を、ある種の美的価値をになう、また、ある種の様式基準にかなう一つの作品 *une oeuvre* と化そうと努力するのである (Foucault 1984a:16-17=1986:18)。

本稿では、ポール・ヴェーヌにならって、このような自己の人生を芸術作品とみなすようなフーコーの主体化を「美学化 *esthétisations*」と呼ぶことにする¹²⁾。後期のフーコーは、自己と他者との関係を考察しながらも、あくまで権力作用に抵抗するための基準点を「自己」に求めたのであり¹³⁾、そのための手段として「自己の技法」という概念を提示したのであった。「政治権力に対する最初にして最後の抵抗点は、自己に対する自己の関係において以外にはない」のである (Foucault 2001:241=2004:294)。

本章における議論は以下のとおりであった。後期のフーコーは権力関係(戦略的關係)とコミュニケーション的關係の区別を認めながらも、ハーバーマスのように「他者」との關係のうちに権力に抵抗する主体像を優先的に見出そうとはしなかった。フーコーは、従属化とは異なる主体化のあり方を考えていたのであり、そのためには「他者の支配」に抵抗することを可能にさせるような「自己の統治」を考えなければならないと主張したのであった。そして、フーコーはそのような主体化のあり方を芸術作品になぞらえて説明しており、本稿ではそれを「自己の技法による美学化」と呼ぶことにした。そのような主体化を考えるにあたって、晩年のフーコーは古代ギリシアやヘレニズム・ローマ期における自己への諸実践に焦点をあてることになるので

あった¹⁴⁾。

第三章 フーコー＝ハーバーマス論争を越えて

本章では、フーコーとハーバーマスのそれぞれの主体化論を比較したうえで、彼らの主体化論の違いは両者の共有しているカント由来の世界図式において、いずれの点を重視するかで異なっている、という仮説を提示する。そのうえで、両者の主体化論に「モノ」に対する視点が欠けている理由の一端がそうした世界図式の理解にみられることを示し、フーコーとハーバーマスに代表されるモダンの社会理論の限界がそこにみられることを明らかにする。

第一節 「社会化による個人化」と「自己の技法による美学化」の比較

ここまで、フーコー＝ハーバーマス論争に沿った形で両者の主体化論を見てきた。ハーバーマスが唱える「社会化による個人化」は、道具的理性に依拠したシステムによる「生活世界の植民地化」に対抗できるような主体を確立するために、他者とのコミュニケーション的関係を重視するものであるといえる。つまり、「私と他者」との関係に重点を置いているといえる。このようなハーバーマスの主体化論は、フーコーの権力論に対する批判として理解できる。ハーバーマスは、フーコーが他者との関係を権力関係のみで考えていることを指摘し、そのようなフーコーの立場からは社会秩序の成立を説明できないことを問題にしたのであった。

それに対して、フーコーの論じる「自己の技法による美学化」は、「自己の技法」によって「自己」を変容させることで、「権力作用」（他者からの支配）に抵抗することができる主体の確立を目的とするものであった。つまり、「私と自己」との関係を重視するものであるといえる。そして、このような後期フーコーの主体化論は、ハーバーマスの批判に対する応答として理解で

きることを示した。つまり、フーコーの立場からすれば、ハーバーマスの主体化論には「自己」との関係が欠けているように見えるのである。

それでは、フーコーとハーバーマスの主体化論における見解の違い（自己との関係を重視するか他者との関係を重視するか）は、何に由来するのだろうか。

政治学者の杉田敦によれば、二人の立場の違いは以下のように整理できる。「フーコーは個人の自由な倫理の実践をより全面に押し出し、ハーバーマスは道徳についての透明な合意をより強調する」と（杉田 1996:63）。杉田は、両者の立場の違いを「『現在』の状況についての両者の認識の違い」にもとめている。つまり、ハーバーマスは「ドイツ社会がともすれば、『戦略的行為』一辺倒に走り易いという認識」を抱いており、それに対して、フーコーは「個人の自由な倫理を認めても、全てが崩壊してしまうようなことはない」と考えているのだと。杉田の主張は、彼らは「近代の構造的安定性」を信じるかどうかで立場が異なり、その立場の違いが、「個人の自由な倫理の実践」（フーコー）と「道徳についての透明な合意」（ハーバーマス）のいずれかを重視する立場の違いにつながっている、というものである。

また、マテュー・キング Matthew King は、フーコーとハーバーマスの立場の違いを「政治的問題」の二つの側面に起因するものだと説明する。すなわち、政治的問題には「道徳的側面」と「倫理的側面」の二つの側面がある。「道徳」は何らかの「原理」に基づいて判断されるものであり、「倫理」は何らかの「価値」に基づいて判断されるものである。そのどちらかを重視するかという点において、フーコーとハーバーマスは異なった立場をとっている、という説明である（King 2009:308）。

いずれの議論もまとめると、個人的な「倫理」を重視するフーコーと、集団的な「道徳」を重視するハーバーマスという図式にまとめられる。そして両者の規範的立場の違いは「近代の構造的安定性」に対する信頼や「政治的問題」に対する認識の違いに起因すると説明される。しかし、このような説

明は外在的要因による説明であり、両者の理論に内在する要因から説明されているわけではない。彼らの理論に内在する要因から両者の立場の違いを説明することできないのだろうか。

第二節 フーコーとハーバーマスの世界図式

ここでは、杉田やキングとは違った視点から、フーコーとハーバーマスの立場の違いをみていく。さきに述べたように、ハーバーマスのコミュニケーション的行為の理論は、三つに分化した世界を前提としている（客観的世界、社会的世界、主観的世界）。意外なことに、後期フーコーは、このハーバーマスの図式とほぼ同じ図式を用いている。フーコーは1984年の論考の中で次のように述べている。「それらの〈実践的総体〉は、三つの大きな領域に属している。すなわち、事物に対する支配の諸関係の領域、他者たちに対する行動の諸関係の領域、自己自身に関わる諸関係の領域のことである」（Foucault 1984c:48=2002:23）。両者の世界図式をまとめたのが以下の表である。

表3. フーコーとハーバーマスの世界図式

フーコー	ハーバーマス
知の諸領域 「事物（モノ）」に対する支配の諸関係の領域	客観的世界 真の言明が可能となる全ての实在（物）の全体
規範性の諸類型 「他者」たちに対する行動の諸関係の領域	社会的世界 全ての正統性に規制される相互人格の関係の全体
主体性の諸形式 「自己」自身に関わる諸関係の領域	主観的世界 発話者だけが可能な体験の全体

この両者の図式の類似について、『コミュニケーション的行為の理論』の英訳者であるトーマス・マッカーシー Thomas McCarthy は次のように指摘している。

一九八三年までにはフーコーは三次元的存在論に同意するようになっていたと思われるが、そこには漠然とであるが、それぞれ客観的世界、社会的世界、そしてわれわれの自己自身〔主観的世界〕にかかわるハーバーマスの三つの関係モデルの痕跡が認められる。(McCarthy 1991:63=1992:184)

マッカーシーは、フーコーが中期の権力還元主義的な存在論とは異なる考え方をするようになった、と主張する。『性の歴史Ⅱ』(1984)で示された「知の領域」「規範性の領域」「主体性の形式」という三つの基軸にもとづく多元的な存在論のことである(Foucault 1984a:10=1986:10-11)。マッカーシーは、このような後期フーコーの図式をハーバーマスの『コミュニケーション的行為の理論』(1981)で提示された近代社会における価値領域の分化を説明する図式(「客観的社会」「社会的世界」「主観的世界」)からの影響だと主張する。しかし、マッカーシーは、一見すると後期のフーコーは三領域を区別しているように見えるが、しかし結局のところ「フーコーの最後の存在論は社会的相互行為を戦略的相互行為と同一視する傾向にあった」ために、権力還元的な存在論から脱しておらず、三領域の区分は意味をなしていないと述べる(McCarthy 1991:64=1992:185)。

しかしながら、ここでは、マッカーシーの仮説に対して、フーコーとハーバーマスが依拠した図式はイマヌエル・カントの三批判に由来するものではないだろうかという仮説を提示したい。

カントの三批判において取り上げられる「理性」「悟性」「感性」のカテゴリーは、ハーバーマスの主張する客観的世界における「真理性」、社会的世界における「正統性」、主観的世界における「誠実性」に相当する(ハーバーマスはウェーバー経由でカントの図式に依拠している)。そうだとすれば、フーコーの主張する「知の領域」「規範性の領域」「主体性の形式」の図式も同様にカントに由来するものだと考えることができるのではないだろうか。

たとえば、前期フーコーは人間の認識を可能にする知のエピステーメを探究したのであり (Foucault 1966=1974:181)、その際の自身の狙いをカントが、アイザック・ニュートンの科学論に依拠した「空間」と「時間」というア priori な条件を探究したのに対して、歴史的に形成される人々の認識の条件である「知のア priori」を見つけるのだと説明している (Foucault 1969=2012:359-360)。また、中期フーコーは、カントが論じたような啓蒙された道徳的人間像の裏側にある抑圧について論じている。「自由を発見した《啓蒙時代》は、規律=訓練をも考案したのだった」(1975:258=1977: 222)。そして、後期フーコーはカントと同様に芸術の問題を取り上げながら、自己の変容について考察したのであった。

このように考えると、フーコーとハーバーマスが依拠する図式はどちらもカントに由来するものであると考えた方が妥当であるように思える。とはいえ、ハーバーマスは「悟性」のカテゴリーに関わる事柄を考察の対象としており、それに対して、フーコーは「感性」のカテゴリーに関わる事柄に関心を抱いていた。実際、ハーバーマスが一貫して考察の対象としてきた「公共圏¹⁵⁾」は、人々が理性や悟性を行使し、個人的な利害をこえて意見交換する場として理解できる。ハーバーマスの関心は、いかにして人々の対等な抑圧なき言語を介した討議を実現することにあつた。それに対して、フーコーが関心を抱いた「狂気」や「セクシュアリティ」の問題は、「非理性的」なものとして公共圏から排除された人々の問題であつたといえる。

第三節 フーコーとハーバーマスのモノとの関係

ここまで、フーコーとハーバーマスの主体化論の前提となっている世界図式をみてきた。そこから、彼らは同じ世界図式を共有しているにもかかわらず、その図式のうち「社会的世界」(悟性)を重視するのか、それとも「主観的世界」(感性)を重視するのかで意見を異にしていることが明らかになった。そのことが、彼らの主体化論における重点の違い(「自己」か「他者」

か)につながっていたのである。

しかしながら、彼らの主体化論と世界図式の関係を見ることでわかることがそれとは別にもう一つある。それは、両者が主体化論において事物(モノ)が果たす役割についてあまり論じていないことである。そのことは何を意味するのだろうか。まずは、二人の主体化論において、事物(モノ)が果たしている役割をみておこう。

ハーバーマスはその主体化論において「他者」との関係を重視していることをみてきた。しかし、ハーバーマスはけっして他者のみを重視しているわけではなかった。たとえば、『公共性の構造転換』では、人々が活発に議論をたたかわせる場所としてサロンやコーヒーハウスを例にあげながら、他者との論議において、そうした「場所」が果たす役割を強調している(Habermas 1962[1990]=1994)。また、『事実性と妥当性』においても、討議倫理にもとづくコミュニケーション的行為を実現するための具体的制度としての議会と市民社会の関係についての考察をおこなっている(Habermas 1992=2002)。ハーバーマスが考える「社会化」による主体化は、そうした「場所」や「制度」によって実現するのである。こうしたハーバーマスの議論から、彼が決して他者だけをその主体化論において重視していないことは明らかである。しかし、彼が考察の対象としているのはあくまで、人々が集まる場所や制度の次元であるといえる。さらに言えば、ハーバーマスは『コミュニケーション的行為の理論』の中で、マックス・ウェーバーが『宗教社会学論集』でおこなった議論に依拠しながら、主観的世界において、事物と関わる行為についても論じている(Habermas 1981:320-331=1985:321-331)。けれども、ハーバーマス自身の行為論に移る際に、その議論は抜け落ちてしまう。ハーバーマスはそういった行為を「再魔術化」として退けるのである¹⁶⁾。

それではフーコーの主体化論における「モノ」はどのように扱われているのか。フーコーもまた事物(モノ)をまったく論じなかったわけではなかった。しかしながら、あくまでフーコーが扱ったのは「狂気」や「健康」をめ

ぐる人々の言説であり、自然科学の視座からそれらを扱ったわけではなかった。また、中期フーコーの権力論は、監獄や学校、軍隊など制度的実体が、主体化＝従属化において重要な機能を果たしていることを指摘している（Foucault 1975=1976）。ジェレミー・ベンサムが考案した「パノプティコン」のメタファーは、フーコーが『監視と処罰』のなかで引用することで広く知られるようになった。そして、後期の「美学化」の議論においてもまた芸術作品の作成をメタファーに用いたり、古代ギリシアやヘレニズム・ローマ期における「自己の技法」の具体的な技術に焦点をあてている。しかし、フーコーの事物（モノ）の扱い方は人間と関わる部分に留まっており¹⁷⁾、あくまで、「人間」を対象とする点でフーコーもまた限界を抱えているのである。

第四節 モダンの社会理論の限界

ハーバーマスとフーコーは事物（モノ）について論じなかったわけではなかったが、それ自体を熱心に論じたわけでもなかった。それはなぜなのだろうか。その理由の一端は彼らの世界図式と学問の関係から理解できるかもしれない。「モダン」の学問は先に述べた三世界への分化に対応する形で成立している¹⁸⁾。たとえば、事物（モノ）を対象とする学問は自然科学であり（たとえば、物理現象を扱う物理学）、社会全体や制度を扱う学問は社会科学であり（たとえば、人々やその関係の総体である社会を対象とする社会学）、個人や人間のあり方を対象とする学問は人文科学（たとえば、個人の感性の発露である芸術作品を対象とする美学）であると区別してきた（表4を参照）。

表4. 行為対象と学問の関係

行為対象	学問分類
事物（モノ）	自然科学
他者	社会科学
自己	人文科学

この三つの学問分類において、とりわけ、人文社会科学は自然科学と区別される。「社会」や「文化」は「自然」とは異なる「法則」によって成立しており、両者はまったく異なるものとみなされる¹⁹⁾。こうした認識は、デカルトの「精神と物質」という区分や、カントの「物自体」へ人間の「理性」は関与することはできない、という議論に象徴されるように「モダン」に特有の考え方だといえる。

そうした「社会と自然」「人とモノ」という二項で近代社会を理解する図式に対しては、近年、問題提起がおこなわれている。科学人類学者のブリュノ・ラトゥール Bruno Latour は、今日われわれが直面している諸問題はもはや自然領域か社会領域のどちらかで起こっているとわけて考えることはできないと主張する (Latour 1993=2008)。たとえば、エコロジー問題を想定すれば、そのことは容易に想像がつく。人間の活動（主に二酸化炭素の排出）が地球に地質学的なレベルの影響を与えていることを示す人新世 Anthropocene の議論などはそういった二項対立の図式に異議を申し立てるものである (Bonneuil and Fressoz 2013=2018)。重要なのは、「社会と自然」「人とモノ」という分断線乗り越えるかたちで思考することである。たとえば、「エコロジー」を自然環境だけでなく、社会環境までも含めた人間が生きる環境の総体として考えるのであれば (Guattari 1989=2008)、フーコーやハーバーマスの議論を無視できないことは明らかである。フーコーの権力論は、パノプティコン（モノ）が、想像上の看守（他者）を囚人たち（自己）に内面化するプロセスを論じたのであり、ハーバーマスの公共圏の議論は、コーヒーハウス（モノ）における、立場が違う人々（他者）の議論が批判的理性を行使する自律した個人（自己）を成立させるプロセスを明らかにしたのであった。このように考えると彼らは「モノ・他者・自己」というカテゴリーすべてにまたがる議論を展開していたといえる。しかしながら、そうした彼らの議論は、それぞれの主体化論に対して十分に反映されていたとはいえないだろう。

おわりに

これまで、フーコー＝ハーバーマス論争はその輪郭があいまいであり、何を論点として争われていたのかが明確であったとはいえなかった。そのため、本論ではこの論争を両者の主体化論を軸に再構成し、検討することで今日の社会理論への示唆を得ることを試みた。

第一章ではハーバーマスのフーコー批判を概観した。ハーバーマスは、フーコーの権力還元論的な議論では権力に抵抗することが不可能であることを問題にしているのを確認した。ハーバーマスは権力に抵抗することができるような主体を形成するためには、他者とのコミュニケーション的關係に立脚した「社会化を通じた個人化」の必要性を訴えたのであった。

第二章では、そうしたハーバーマスの批判に対して、後期のフーコーは「自己の技法による美学化」を考えていたことを明らかにした。フーコーは、ハーバーマスによる「道具的行為」「戦略的行為」「コミュニケーション的行為」の区別を認めながらも、ハーバーマスとは異なり、「他者」ではなく「自己」との関係を重視する主体化論を提示しようと試みていたことを確認した。

第三章では、フーコーとハーバーマスの主体化論を比較した。そこで明らかになったのは、両者の主体化論の差異は、彼らの規範的立場の違いからだけでなく、両者が共有する世界図式（客観的世界＝モノ、社会的世界＝他者、主観的世界＝自己）において何を重視するかどうかで異なっていることであつた。さらに、そのような世界図式の理解の違いは、たんに両者の立場の違いにとどまるだけでなく、近代の学問分野の区分（自然科学、社会科学、人文科学）に由来することを明らかにした。

フーコーとハーバーマスがその主体化論において、モノとの関係が比較的軽視されていることは、自然と社会、あるいは、自然科学と人文社会科学という分断線を前提として議論を組み立てる「モダン」の社会理論の特徴を反

映している。しかしながら、そうした分断線を前提とした社会理論では取り扱うことが困難な諸問題がさまざまな場所で今日みられる。そうしたグローバルな規模における社会問題を考えるうえで、学際的な活動をおこなってきたフーコーとハーバーマスの姿勢は見習うべき点があり、彼らの社会理論を「モノ」に対する視点を織り込む形で前進させていく必要があるのではないだろうか²⁰⁾。

注

- 1) 本稿における「注」「脚注」「引用」「文献」の表記方法は、日本社会学会が定める「社会学評論スタイルガイド(第二版)」の形式に則るものとする。また訳文の引用については一部訳文を変更している。
- 2) たとえば、フレイザー (Fraser 1981;1985)、ホネット (Honneth 1985=1992)、バーンスタイン (Bernstein 1991=1997)、マッカーシー (McCarthy 1991=1992)、イングラム (Ingram 1994)、クーガー (Kögler 1996)、フライブジェルグ (Flyvbjerg 1998) を参照。
- 3) フーコーを反啓蒙主義の「青年保守派」と呼んだこの講演は大きな反響を呼んだ (Cusset 2003=2010)。しかしながら、後年あるインタビューにおいて、ハーバーマスはフーコーを「青年保守派」呼んだことを性急であったかもしれないと述べている (Habermas and Foessel 2015)。ハーバーマスの著作の翻訳者でもある三島憲一は、ハーバーマスがそうした非難をおこなった理由をドイツの出版事情にもとめている。

ポストモダンの本を出す出版社はかなり右に偏った本も出していることが、ドイツでは多い。出版社が特定の知的=文化的プログラムを体現している伝統があるだけに、このことは問題であるし、またこの伝統を知る者から見れば、ハーバーマスの言葉を使って「青年保守主義」というレッテルをフーコーやデリダに貼るようになるのも無理はない。(三島 2006:7)

- 4) フーコーとハーバーマスが公式の場で討論をおこなうことはなかったが、しかし、彼らに面識がなかったわけではない。1983年にハーバーマスは、フーコーの友人であり同僚でもあった歴史家ポール・ヴェーヌの招待で、コレージュ・ド・フランスにおいて全四回の講義をおこなっている (Habermas 1985=1990: X IX)。この約1カ月間のパリ滞在時に、ハーバーマスはフーコーと幾度も会っている (Foucault 1984d=2002:34-35; Habermas 1986a=1995:172-173)。

また、マイケル・ケリー (Kelly 1994: :2-3) とエイミー・アレン (Allen 2009:1) の

主張とは異なり、二人が公式の場で討論する機会は少なくとも三度あった。(1) 1981年のパークレーでのセミナー (Foucault 1983b[2001c]:1266=2001:319; Defert 1994=1998:69)、(2) 1983年秋のボストン大学での討論会 (Schmid 2013)、(3) 1984年秋のパークレーでの討論会 (Habermas 1986=1995:172)、である。しかし、そのいずれの機会も実現することはなかった。

- 5) フーコー＝ハーバーマス論争を共通のトピックで論じる際に、多く引き合いに出されるのはカントの小論「啓蒙とは何か」である。ドレイファスとラビノウ (1986=1996) や山脇 (1995) がそれにあたる。
- 6) しかし、原著の出版が1985年であったために、フーコー自身はハーバーマスによる批判に目を通すことはなかった (フーコーは1984年に亡くなっている)。そのことがフーコー＝ハーバーマス論争をややこしいものになっている一因である。
- 7) この三つのアポリアの指摘は、ハーバーマスのオリジナルというわけではない。ハーバーマス自身が『近代の哲学的ディスクルス』の中で、アクセル・ホネットやナンシー・フレイザーの論考を引用しながら三つのアポリアについて論じている。そのため、ハーバーマスによるフーコーの権力論批判は、さまざまな批判を整理し、まとまった形で提示したことに意義があったと考えるべきだろう。
- 8) 超越論的＝経験論的な主体の二重性の問題について、フーコーが『言葉と物』でおこなった批判はよく知られている。フーコーとハーバーマスがともにそのようなカントの主体像を批判していることに着目した論考としては Kelly (1994) がある。
- 9) ここでフーコーが言及しているのは、ハーバーマスが1965年におこなったフランクフルト大学への就任講演講義において示した「労働」「言語」「支配」という媒体のことである (Foucault 2015:42,n14)。この三つの媒体についてハーバーマス自身は以下のような説明をおこなっている。

現実を先験的・必然的にとらえる特殊な視点の相違に応じて、可能な知識の三つのカテゴリーが確定される。技術的な処理能力を拡大する情報、共通の伝統のもとの行動の方向づけを可能にする解釈、意識を基底にある力への従属から解放する分析、この3つがそれである。そうした視点は、ある種の利害連関から発するが、その連関は、もともと社会化の特定の媒体、すなわち、労働、言語、支配とむすびついている。(Habermas 1968=2000:186)

ハーバーマスが「社会化の媒体」の三類型 (「労働」「言語」「支配」と呼ぶものを、フーコーは「生産の技法」「記号化の技法」「支配の技法」と呼んでそれぞれを対応させている。そして、ハーバーマスとの違いとして四つ目の「自己の技法」を付け加えるのである。

表 5. 媒体（ハーバーマス）と技法（フーコー）の対応関係

「認識と関心」(1965)	「ハウィンソン講演」(1980)
労働	生産の技法
言語	記号化の技法
支配	支配の技法
—	自己の技法

- 10) この論考は当初、英語で刊行されており、後にフランスで出版される際に、フーコー自身の手によってその第二部が書き改められている（フランス語版の扉絵の裏に、そのような記述がある）。しかしながら、*Dits et écrits*（『ミシェル・フーコー思考集成』）にはその記述が抜け落ちてしまっている。
- 11) 本節は田辺（2006）の議論を参照している。しかし、田辺ははっきりとした形で両者を比較しているわけではない。その理由のひとつは、田辺がいわゆる現代思想全般をあつかっており、フーコーとハーバーマスにだけ焦点をあてるわけではないことがあげられる。
- 12) フーコーと美学の関係については武田（2014）を参照。後期フーコーが主張する主体化を「美学化」とする見方については、ポール・ヴェーヌ Paul Veyne『フーコー』の第8章を参照（Veyne 2008=2010）。ヴェーヌは、社会化とは異なるこの主体化を「美学化」と呼んでいる。

私が思うに、社会化の一種としての主体化から、フーコーが美学化と呼んだそれとは別のプロセスを区別しなければならない。この美学化 *esthétisations* という言葉を、彼は、もはや主体の構成という意味でもなければ、ダンディの耽美主義という意味でもなく、「自己の自己自身による変容」の主導という意味で用いたのであった。（Veyne 2008=2010:174-175）

- 13) フーコーは「自己」との関係だけでなく、「他者」との関係も重視していたことを詳述すべきかもしれない。しかし、本稿ではハーバーマスの主体化論と対比をおこなうことを重視したために、その点の考察を深めることができていない。その点に関して、藤田（2008）は後期フーコーの「自己への配慮」を、「他者」との関係から論じている。また、後期フーコーの主体化（美学化）が「個としての自己」への回帰とは異なるより射程の広いものである、と主張する論考にジル・ドゥルーズ『フーコー』の第5章がある（Deleuze 1986=2007）。
- 14) フーコーはある小論の中で次のように述べている。「啓蒙の時代がわれわれの歴史のなかで、さらには政治テクノロジーの発展のなかで極めて重要な段階であったとして

も、われわれがいかにして自らの歴史のワナにはまってしまったかを理解しようと欲するならば、やはりわれわれははるか遠い昔のプロセスを参照する必要があるのではないと思われる」(Foucault 1981:955=2001:331、傍点筆者)。

- 15) 花田 (1996) が指摘するように、ハーバーマスが一貫して考察の対象としてきたのは、抽象的な概念としての「公共性」というよりも、現実に存在する社会空間としての「公共圏」である点には注意を払わなければならない。後述するように、ハーバーマスがモノに対する視座を持っていなかったわけではないことをこの点は証明するからである。
- 16) 哲学者の丸山徳次はベルンハルト・ヴァルデンフェルスの現象学の立場からの批判を引用しながらハーバーマスを次のように批判している。

実はハーバーマスは、「客観化されていない周囲世界」と美的に関係したり、道徳的に関係したりする可能性を示唆している。基礎にある組み合わせ法に従うなら、これは、われわれ自身の主観性を外的自然に投影して、そこに表現内容を付与することを意味するか、それとも社会性を自然にまで拡張して、それに道徳的要求を認める、ということの意味するだろう。自然との美的な交わりは無害である。なぜなら、そこに成立する主観性は客観化する態度を壊しはしないから。これに反して、自然の主観的解釈や道徳的連帯化によって新境地を拓く試みは、すべて「再魔術化という代価を支払う宥和」として退けられてしまう(丸山 2016:283)。

また、マーティン・ジェイは、ハーバーマスの理論が抱える「自然」理解についての問題を指摘したのがフーコーを含むフランスのポスト構造主義者たちだったのだと整理している。

端的に言えば、言語が自然に対する解毒剤、人間が自然に埋め込まれていることに対する解毒剤とみなされず、むしろ、少なくとも部分的には人間の非合理的「自然性」そのものの表現とみなされるとしたらどうであろうか。もしこれらのことが妥当性をもつとしたら、すでにいくつかの弱点を抱え込んでいるハーバーマスの西欧マルクス主義的な全体性概念の実験的再構築は、さらなる弱点を抱え込むと考えられねばならないことになる。

現代フランスのポスト構造主義哲学、とりわけリオタール、デリダ、フーコー、ラカン、ドゥルーズが提起したのがまさに上記の問題であり、これに似た諸問題であった (Jay 1984=1993:787)。

しかしながら、そうしたハーバーマスの自然観に対する批判に対しては、ハーバー

マスの立場から人新世における環境問題と討議を結びつける議論もある (Gunderson 2014)。

- 17) フーコーの「自己への配慮」の扱い方については、ハイデガーのものとは異なる点に注意を向けるべきかもしれない。中山(2000)はハイデガーの論じた「自己への配慮」を少しではあるが論じている。ハイデガーの議論にあって、フーコーの議論にないものとして「道具」(モノ)との関係があるだろう。近年のオブジェクト指向存在論(Object-Oriented Ontology)を提唱するグレーム・ハーマンはハイデガーの議論に依拠しながら「モノ」との関係を再考することを提唱している(Harman 2011=2017)。
- 18) イマヌエル・カントの「諸学部争い」は、中世以来の学問の階層秩序(神学—哲学—自由学芸)が揺らいでいた時期の著作であり、近代以降の学問が専門分化しようとしている時期を反映している著作として捉えることもできる。またフーコーの『言葉と物』は「人間諸科学の考古学」という副題を持つように、まさに近代の人文科学の成立の背景とその前史をたどることをその目的としていた。とりわけ、フーコーが取り上げた近代の人間諸科学(経済学・言語学・生物学)がノミナリズムの系譜に位置づけられる学問であることの意味を検討する必要があるだろう。この点に関しては坂部(1997)を参照。
- 19) オーギュスト・コントやハーバード・スペンサーなど、社会学の黎明期の人物たちが社会に固有の「法則」を見出そうとしたことなどはその一例である。
- 20) 本稿の最初に述べたように、フーコー=ハーバーマス論争が盛んにおこなわれた1980年代以降、グローバル化の進展、とりわけ、金融市場の拡大(金融化)と情報技術の発展(情報化)は「ヒト・モノ・カネ・サービス」の世界規模での移動を加速させ、社会の在り方を大きく変えている。社会のレベル(マクロ)における「金融化」や「情報化」といった変化は、個人の主体化のレベル(ミクロ)においては、「クレジットカード」や「スマートフォン」の普及とそれにとまなう新たな主体化としてとらえることができる(Bauman and Lyon 2013=2013; Ross 2014)。そうした新たな「モノ」との関係性をフーコーとハーバーマスの理論体系に組み込む作業が必要だろう。

参考文献

フーコーの著作

- Foucault, Michel, 1966, *Les mots et les choses: une archéologie des sciences humaines*, Gallimard. (= 1974, 渡辺一民・佐々木明訳『言葉と物——人文科学の考古学』新潮社.)
- Foucault, Michel, 1969, *L'archéologie du Savoir*, Gallimard. (= 2012, 慎改康之訳『知の考古学』河出書房新社.)
- Foucault, Michel, 1975, *Surveiller et punir: naissance de la prison*, Gallimard. (= 1977, 田村俣訳『監獄の誕生——監視と処罰』新潮社.)

- Foucault, Michel, 1976, *La volonté de savoir*, Gallimard. (= 1986, 渡辺守章訳『知への意志——性の歴史Ⅰ』新潮社.)
- Foucault, Michel, 1981, «Omnes et singulatim»: vers une critique de la raison politique»; trad. P. E. Dauzat; université de Stanford, 10 et 16 octobre 1979), in McMurrin (S.), éd., *The Tanner Lectures on Human Values*, t. II, Salt Lake City, University of Utah Press, 1981: 223-254. (= 2001, 北山晴一訳「全体的なものとの個人的なもの——政治的理性批判に向けて」『思考集成Ⅷ』筑摩書房.)
- Foucault, Michel, 1982, "The Subject and Power," in Dreyfus, Hubert L. and Rabinow, Paul eds, *Michel Foucault: beyond structuralism and hermeneutics*, 2nd ed., University of Chicago Press. [2001a], «Le sujet et le pouvoir», *Dits et Ecrits tome II* texte n° 306 (= 2001, 渥海和久訳「主体と権力」『思考集成Ⅸ』筑摩書房, 10-32.)
- Foucault, Michel, 1983a, "On the Genealogy of Ethics: an Overview of Work in Progress," Dreyfus, Hubert L. and Rabinow, Paul eds, *Michel Foucault: beyond structuralism and hermeneutics*, 2nd ed., University of Chicago Press, 229-252. [2001b], «À propos de la généalogie de l'éthique: un aperçu du travail en cours», *Dits et Ecrits tome II* texte n° 344 (= 2001, 浜名優美訳「倫理の系譜学について——進行中の仕事の概要」『思考集成Ⅸ』筑摩書房, 228-269.)
- Foucault, Michel, 1983b, «Structuralisme et poststructuralisme»; entretien avec G. Raullet, *Telos*, vol. XVI, no 55, printemps: 195-211. [2001c] «Structuralisme et poststructuralisme»; entretien avec G, *Dits et Ecrits tome II* texte n° 330 (= 2001, 黒田信昭訳「構造主義とポスト構造主義」『思考集成Ⅸ』筑摩書房: 298-334.)
- Foucault, Michel, 1984a, *L'usage de plaisirs*, Gallimard. (= 1986, 田村俶訳『性の歴史Ⅱ——快楽の活用』新潮社.)
- Foucault, Michel, 1984b, *Le souci de soi*, Gallimard. (= 1986, 田村俶訳『性の歴史Ⅲ——自己への配慮』新潮社.)
- Foucault, Michel, 1984c, "What is Enlightenment?," Rabinow Paul ed., *The Foucault Reader*, Pantheon Books: 32-50. (= 2002, 石田英敬訳「啓蒙とは何か」『思考集成Ⅹ』筑摩書房.)
- Foucault, Michel, 1984d, "Politics and Ethics: An Interview," Rabinow, Paul, ed., *Foucault Reader*, New York: Pantheon Books: 373-380. (= 2002, 高桑和巳訳「政治と倫理——インタビュー」『思考集成Ⅹ』筑摩書房, 34-43.)
- Foucault, Michel, 1984e, L'éthique du souci de soi comme pratique de la liberté, *Dits et Ecrits tome IV* texte n° 356. (= 2002, 廣瀬浩司訳「自由の実践としての自己への配慮」『思考集成Ⅹ』筑摩書房.)
- Foucault, Michel, 1988, *Technologies of the Self: A Seminar with Michel Foucault*, University of Massachusetts Press. (= 2004, 田村俶・雲和子訳『自己のテクノロジー

——フーコー・セミナーの記録』岩波書店)

Foucault, Michel, 2001, *L'herméneutique du sujet: cours au Collège de France (1981-1982)*, Gallimard/Le Seuil. (= 2004, 廣瀬浩司・原和之訳『主体の解釈学: コレージュ・ド・フランス講義 1981-1982 年度 (ミシェル・フーコー講義集成 11)』筑摩書房.)

Foucault, Michel, 2015, "Subjectivity and Truth," Fruchaud, Henri-Paul and Lorenzini, Daniele eds., *About the Beginning of the Hermeneutics of the Self: Lectures at Dartmouth College 1980*, University of Chicago Press: 19-51.

ハーバーマスの著作

Habermas, Jürgen, 1968, *Technik und Wissenschaft als „Ideologie“*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 2000, 長谷川宏訳『イデオロギーとしての技術と科学』平凡社.)

Habermas, Jürgen, 1976, *Zur Rekonstruktion des historischen Materialismus*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 2000, 清水多吉監訳『史的唯物論の再構成』法政大学出版局.)

Habermas, Jürgen, 1980, "Die Moderne: Ein Unvollendetes Projekt", *Kleine Politische Schriften*, I-IV. (= 2000, 三島憲一編訳『近代——未完のプロジェクト』岩波書店.)

Habermas, Jürgen, 1981, *Theorie des kommunikativen Handelns*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag. (= 1985, 河上倫逸ほか訳『コミュニケーション的行為の理論 (上)』未來社.)

Habermas, Jürgen, 1981, *Theorie des kommunikativen Handelns*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag. (= 1986, 藤沢賢一郎ほか訳『コミュニケーション的行為の理論 (中)』未來社.)

Habermas, Jürgen, 1981, *Theorie des kommunikativen Handelns*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag. (= 1987, 丸山高司ほか訳『コミュニケーション的行為の理論 (下)』未來社.)

Habermas, Jürgen, 1982, *Moralbewußtsein und kommunikatives Handeln*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 2000, 三島憲一ほか訳『道德意識とコミュニケーション行為』岩波書店.)

Habermas, Jürgen, 1985, *Der philosophische Diskurs der Moderne*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 1990, 三島憲一ほか訳『近代の哲学的ディスクルス I』, 岩波書店.)

Habermas, Jürgen, 1985, *Der philosophische Diskurs der Moderne*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 1990, 三島憲一ほか訳『近代の哲学的ディスクルス II』, 岩波書店.)

Habermas, Jürgen, 1986, "Mit dem Pfeil ins Herz der Gegenwart: Zu Foucaults Vorlesung über Kants „Was ist Aufklärung,“ *Die neue Unübersichtlichkeit. Kleine Politische Schriften V*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 1995, 河上倫逸監訳「現代の心臓に打ち込まれた矢とともに——カントの『啓蒙とはなにか』についてのフーコーの講義をめぐって」『新たな不透明性』松籟社, 171-180.)

- Habermas, Jürgen, 1988, “Individuierung durch Vergesellschaftung. Zu G. H. Meads Theorie der Subjektivität,” *Nachmetaphysisches Denken. Philosophische Aufsätze*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 1990, 藤澤賢一郎・忽那敬三訳「社会化による個性化——ジョージ・ハーバード・ミードの主体性理論」『ポスト形而上学の思想』未来社, 230-298.)
- Habermas, Jürgen, 1962=1990, *Strukturwandel der Öffentlichkeit*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 1994, 細谷貞雄・山田正行訳『公共性の構造転換（第二版）』未来社.)
- Habermas, Jürgen, 1992, *Faktizität und Geltung: Beiträge zur Diskurstheorie des Rechts und des demokratischen Rechtsstaats*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 2002, 河上倫逸・耳野健二訳『事実性と妥当性——法と民主的法治国家の討議理論にかんする研究（上）』未来社.)
- Habermas, Jürgen, 1992, *Faktizität und Geltung: Beiträge zur Diskurstheorie des Rechts und des demokratischen Rechtsstaats*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 2002, 河上倫逸・耳野健二訳『事実性と妥当性——法と民主的法治国家の討議理論にかんする研究（下）』未来社.)
- Foessel, Michaël and Habermas, Jürgen, 2015, “Critique and communication: Philosophy's missions.” *EUROZINE*. Retrieved January 25, 2018, from <http://www.eurozine.com/critique-and-communication-philosophys-missions/>

その他の著作

- Allen, Amy, 2009, “Discourse, Power, and Subjectivation: The Foucault/Habermas Debate Reconsidered,” *The Philosophical Forum*, 40 (1), 1-28.
- Ashenden, Samanta and Owen, David eds., 1999, *Foucault Contra Habermas: Recasting the Dialogue between Genealogy and Critical Theory*, Sage Publications.
- Bauman, Zygmunt and Lyon, David, 2013, *Liquid Surveillance: A Conversation*, Polity. (= 2013, 伊藤茂訳『私たちが、すすんで監視し、監視される、この世界について——リキッド・サーベイランスをめぐる7章』青土社.)
- Bernstein, Richard, J. 1991, *The New Constellation: The Ethical-Political Horizons of Modernity/Postmodernity*, Polity Press. (= 1997, 谷徹・谷優訳『手すりなき思考——現代思想の倫理 - 政治的地平』産業図書.)
- Bonneuil, Christophe and Fressoz, Jean-Baptiste, 2013, *L' événement anthropocène*, Seuil. (= 2018, 野坂しおり訳『人新世とは何か——〈地球と人類の時代〉の思想史』青土社.)
- Cusset, François, 2003, *French Theory: Foucault, Derrida, Deleuze & Cie et les mutations de la vie intellectuelle aux Etats-Unis*, La Découverte. (= 2010, 桑田光平ほか訳, 『フレンチ・セオリー——アメリカにおけるフランス現代思想』NTT出版.)
- Defert, Daniel, 1994, “Chronologie,” *Dits et Écrits, vol. 1 : 1954-1969*, Paris: Gallimard. (=

- 1998, 石田英敬訳「年譜」『思考集成 I』筑摩書房, 3-76.)
- Deleuze, Gilles, 1986, *Foucault*, Paris : Editions de Minuit. (= 2007, 宇野邦一訳『フーコー』河出書房新社.)
- Dreyfus, Hubert L. and Rabinow, Paul, 1986, "What is Maturity? Habermas and Foucault on 'What is Enlightenment?'," Hoy, David, Couzens ed., *Foucault: A Critical Reader*, New York: Blackwell. (= 1996, 鷺田清一・中垣晃一訳「成熟とは何か——『啓蒙とは何か』をめぐるハーバーマスとフーコー」山形頼洋ほか訳『ミシェル・フーコー——構造主義と解釈学を超えて』筑摩書房, 360-375.)
- Flyvbjerg Bent, 1998, "Habermas and Foucault: Thinkers for Civil Society?," *The British Journal of Sociology*, (49) 2, pp.210-233.
- Fraser, Nancy, 1981, "Foucault on Modern Power: Empirical Insights and Normative Confusions," *Praxis International*, (1) 3, 272-87.
- Fraser Nancy, 1985, "Michel Foucault: A "Young Conservative" ?," *Ethics*, (96) 1, The University of Chicago Press, pp.165-184.
- Guattari, Félix, 1989, *Les trois écologies*, Editions Galilée. (= 2008, 杉村昌昭訳, 『三つのエコロジー』平凡社.)
- Gunderson, Ryan, 2014, "Habermas in Environmental Thought: Anthropocentric Kantian or Forefather of Ecological Democracy?," in *Sociological Inquiry*, 84 (4), 626-653.
- Harman, Graham, 2011, *The Quadruple Object*, Zero Books. (= 2017, 岡嶋隆佑監訳『四方対象——オブジェクト指向存在論入門』人文書院.)
- Honneth, Axel, 1985, *Kritik der Macht: Reflexionsstufen einer kritischen Gesellschaftstheorie*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 1992, 河上倫逸監訳『権力の批判——批判的社会理論の新たな地平』法政大学出版局.)
- Ingram David, 1994, "Foucault and Habermas on the subject of reason," Gutting Gary ed, *The Cambridge Companion to Foucault*, Cambridge [England] ; New York : Cambridge University Press, pp.215-261.
- Jay, Martin, 1984, *Marxism and Totality : the adventures of a concept from Lukács to Habermas*, University of California Press. (=1993, 荒川幾男ほか訳『マルクス主義と全体性——ルカーチからハーバーマスへの概念の冒険』国文社.)
- Kelly, Michael ed., 1994, *Critique and Power: Recasting the Foucault/Habermas Debate*, The MIT Press.
- Kelly, Michael, 1994, "Foucault, Habermas, and the Self-Referentiality of Critique," Kelly, Michael ed., *Critique and Power: Recasting the Foucault/Habermas Debate*, The MIT Press, 365-400.
- King, Matthew, 2009, "Clarifying the Foucault–Habermas Debate: Morality, Ethics, and 'normative Foundations'," *Philosophy & Social Criticism*, 35 (3), 287-314.

- Kögler Hans-Herbert, 1996, "The Self-Empowered Subject: Habermas, Foucault, and Hermeneutic Reflexivity," *Philosophy and Social Criticism*, (22), pp.13-44.
- Lash, Scott, 1994, "Reflexivity and its Duples: Structure, Aesthetics, Community," Beck, Ulrich, Giddens, Anthony and Lash, Scott, *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*, Polity Press, 110-173. (= 1997, 「再帰性とその分身——構造、美的原理、共同体」松尾精文ほか訳『再帰的近代化——近現代の社会秩序における政治、伝統、美的原理』而立書房, 205-315.)
- Latour, Bruno, 1993, *We have never been modern*; trans., Porter, Catherine, Harvard University Press. (= 2008, 川村久美子訳『虚構の「近代」——科学人類学は警告する』新評論.)
- Lazzarato Maurizio, 2013, *La fabrique de l'homme endetté : essai sur la condition néolibérale*, Seuli. (= 2016, 杉村昌昭訳『「借金人間」製造工場——「負債」の政治経済学』作品社.)
- McCarthy, Thomas, 1991, "The Critique of Impure Reason: Foucault and the Frankfurt School," *Ideals and Illusions: On Reconstruction and Deconstruction in Contemporary Critical Theory*, The MIT Press. (= 1992, 細見和之訳「不純理性批判——フーコーとフランクフルト学派」新田義弘他編『(岩波講座現代思想 8 批判理論) 岩波書店, 155-213.)
- Ross Andrew, 2014, *Creditocracy: And the Case for Debt Refusal*, OR books.
- Schmidt, James, 2013, "Foucault, Habermas, and the Debate That Never Was," *Persistent Enlightenment*.
<https://persistentenlightenment.com/2013/07/17/debate1/>
- Veyne, Paul, 2008, *Michel Foucault. Sa pensée, sa personne*, Albin Michel. (= 2010, 慎改康之訳『フーコー——その人その思想』筑摩書房.)
- Žižek, Slavoj, 1989, *The Sublime Object of Ideology*, Verso. (= 2000, 鈴木晶訳『イデオロギーの崇高な対象』河出書房新社.)
- 坂部恵, 1997, 『ヨーロッパ精神史入門——カロリング・ルネサンスの残光』岩波書店.
- 杉田敦, 1996, 「啓蒙と批判——カント・フーコー・ハーバーマスについての断章」『法学志林』, 93 (2), 31-68.
- 武田宙也, 2014, 『フーコーの美学——生と芸術のあいだで』人文書院.
- 田辺秋守, 2006, 『ピフォア・セオリ——現代思想の〈争点〉』慶應義塾大学出版会.
- 中山元, 2000, 「自己への配慮——フーコー、そしてアレント」中山元編著『ポリロゴス 1』冬弓舎, 64-104.
- 花田達朗, 1996, 『公共圏という名の社会空間——公共圏、メディア、市民社会』木鐸社.
- 藤田博文, 2008, 「M・フーコーにおける「自己への配慮」——〈倫理-政治的〉な自律主体

- の形成を中心に」『社会学評論』, 59 (3), 478-494.
- 藤原保信・三島憲一・木前利秋編著, 1987, 『ハーバーマスと現代』新評論.
- 丸山徳次, 2016, 『現象学と科学批判』晃洋書房.
- 向山恭一, 1994, 「国家と民主主義」荻原能久ほか『国家の解剖学——政治学の基礎認識』日本評論社, 167-207.
- 三島憲一, 2006, 「ハーバーマスとデリダのヨーロッパ」『早稲田政治経済学雑誌』, 362, 4-18.
- 山脇直司, 1995, 「啓蒙理解のゆくえ——フーコーとハーバーマス、社会哲学の変容」『思想』 855, 4-25.